

平成 22 年 6 月 4 日現在

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19592447
 研究課題名（和文） 客観的臨床能力試験（OSCE）による卒業時看護技術到達度評価に向けた教授法の検証
 研究課題名（英文） Validation of teaching method using Objective Structured Clinical Examinations which aim to test an achievement of nursing skills at a time of graduation.
 研究代表者
 樋之津 淳子（HINOTSU ATSUKO）
 札幌市立大学・看護学部・教授
 研究者番号：90230656

研究成果の概要（和文）：

4年間の大学教育でどの程度、看護実践ができることをめざすのかについて学年別に詳細に目標を示した。そして、各学年の最後に達成度の実技試験を行った。その結果をもとに教員は、担当科目の内容や教育方法を見直した。学生は、十分できなかった技術や態度が明らかになり、今後、その改善に向けて取り組もうとしていた。3年間継続した結果、学生はこれらの成果を患者を受け持つ実習で役立てていることがわかった。

研究成果の概要（英文）：

In this study, the educational goals of nursing practice at every end of the academic year and a time of graduation were clarified. Based of them, at the every end of the academic year, nursing skills of the students were tested. The results were reflected to the contents and methods of the responsible subjects by the academic staff. Students were motivated to cover their weak points which were clarified by the test and tried to improve the skills. After three years practice, it is found that the students benefit from the system for clinical practice for patients.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：看護教育学

1. 研究開始当初の背景

(1) 2003年、厚生労働省は「看護基礎教育における技術教育のありかたに関する検討会」により、臨地実習において看護学生が

行う基本的な看護技術の水準を提示した。

(2) 2004年、文部科学省の看護学教育の在り方検討会では、「看護実践能力の育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」を報告

した。その中で学士課程における看護実践能力とは何か明確にされ、高等教育における看護実践能力育成とその評価の重要性を提言した。

(3) 2004年の日本看護協会による調査報告によると、入職1年未満の看護師の76.9%が専門的知識・技術の不足に悩んでいると答え、9.3%が就職後1年以内に離職しているとの結果が出された。また、新卒看護職員の職場定着を困難にしている要因として病院調査の76.2%、学校調査の80.3%が「基礎教育終了時点の能力と看護現場で求める能力とのギャップ」をあげていた。看護職に求められる役割や能力に対する社会の期待が高まっているにもかかわらず、看護現場で求められる能力と新人看護職員の能力が乖離しているため、新人は医療事故などの不安を抱えながら従事しているという実態がクローズアップされた。

(4) 2005年12月から医療系教育で臨床技能を適正に評価するための方法として有効とされている客観的臨床能力試験(以下、OSCE; Objective Structured Clinical Examination)が全国の医学・歯学教育で共用試験とともに実施された。薬学等の他の医療専門職においても認定試験等で、OSCEが導入されはじめている。一方、看護学教育では従来から、個々の専門領域単位での技術試験は行われていたが、看護実践能力を評価する試験としてOSCEを導入している看護系大学は少ない。以上(1)から(4)に示した背景のもと、看護学教育におけるOSCEの妥当性や評価の客観性を十分議論し、看護の臨床技能を測定・評価に向けた実施可能性を吟味する必要がある。今後、看護学においてもコアカリキュラムの制定、共用試験やOSCE等による、看護実践能力の客観的評価の導入に向けた準備性を高めておく必要があると考え、本研究に着手した。

2. 研究の目的

本研究は4年間で修得する看護技術項目の精選と到達目標の設定、OSCEによる卒業時到達度の評価と教授法を検証することを目的とした。加えて年度単位で実施を計画したOSCEの実施可能性を検証し、必要なFD(Faculty Development)研修を企画しながら、教育実践のデータを蓄積していくことも本研究の目的である。以上により、専門領域単位で修得した技術の有機的統合を図り、学生個々の看護実践能力を具体的に客観的に数値化することによって教育現場で解決すべき問題の所在が明確になることが期待できると考えた。

3. 研究の方法

(1) 4年間で修得する看護技術項目の精選と到達目標の明確化:看護学を教授する9領域(基礎、成人、老年、小児、母性、在宅、

精神、地域、管理)の代表者による協議を行い、それぞれの領域がどの技術項目をどの学年で教授するかについて議論した。さらに、到達目標を一般学修目標と行動目標に分けて学年別に定め、文章化した。

(2) OSCE実施対象と概要:本学は、2006年度に開学したため、研究初年度在籍していたのは2学年であった。従って、OSCE実施は学年進行にあわせて行ったため、実施対象は2007年度1、2年次、2008年度1~3年次、2009年度1~4年次である。各々の学年別OSCE実施に向けた課題設定、シナリオ作成、評価項目、評価基準の作成を行った。OSCE課題や評価は(1)で行った各年次の到達目標、教授内容との整合性を確認した上で調整し、決定した。また、OSCE実施マニュアルを作成し、学生への説明会を複数回行った。模擬患者への説明と練習を行い、年度末にOSCEを実施した。

(3) OSCE受験学生のうち、研究参加に同意が得られたのは2007年度122名、2008年度186名、2009年度146名であった。うち、インタビューに協力した学生は2007年度10名、2008年度13名、2009年度15名であった。

①OSCE評価データは、1課題に2名の評価者の評定平均値をデータとした。②OSCE終了後、学生がとらえるOSCE、問題や要望、学生自身への効果などについて半構造的インタビューを実施した。③OSCE終了後に学生、教員、模擬患者に質問紙調査を行った。

4. 研究成果

(1) 本学4年間の学士課程における「看護実践能力の育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」を一般目標(GIO)と行動目標(SBO)に分けて各学年別に明確にした。さらに、各学年での看護実践能力の項目ごとに知識レベル、ならびに実践レベルの到達を示した。これらを冊子にして学生に配布し、各専門科目における学修内容との関連について説明することが可能となった。

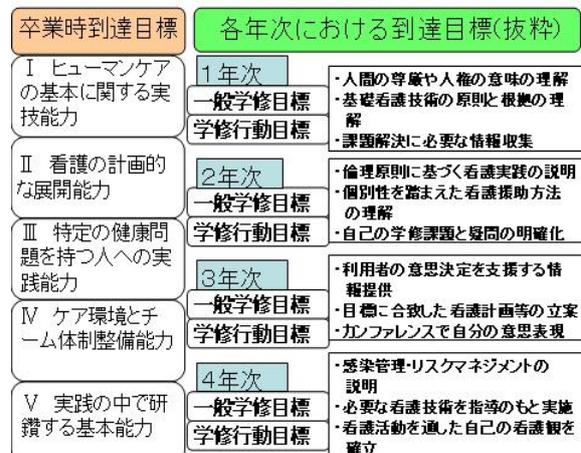


図1. 卒業時到達目標と各年次別到達目標

(2) OSCE の課題は、(1) の到達目標や教授内容との整合性を確認した上で作成した。さらに 2009 年度には、看護実践能力の大項目・細科目と各演習科目で教授している内容とを対応させ、さらにその学年での OSCE で到達度を評価したいものを抽出することができた。

△: 知識レベルでの到達 ○: 実践レベルでの到達

I ヒューマンケアの基本に関する実践能力		1年	2年	3年	4年
1) 人の尊厳の重視と人権の擁護を基本に据えた援助行動	① 個別な価値観・信条や生活背景を持つ人の理解	○			
	② 人の尊厳及び人権の意味を理解し擁護する行動	○			
	③ 個人情報を持つ意味の理解、情報の適切な取り扱い	○			
2) 利用者の意思決定を支える援助	① 利用者の意思決定に必要な情報の提供	△	○		
	② 利用者の思い・考え・意思決定の共有、意思表明への援助、意思決定後の支援		△	○	
	③ 利用者の意思の関係者への伝達、代弁者役割の遂行		△	○	
3) 多様な年代や立場の人との援助的人間関係の形成	① 利用者の思い、考え等意思の適切な把握	△	○		
	② ケアに必要な他者との人間関係の形成	△	○		

表 1. 卒業時到達目標とした看護実践能力と各年次別到達進度表 (一部抜粋)

(3) 各年度に在籍していた学生に対して OSCE を実施し、学年ごとの実践能力到達度を評価した。図 1 に示したように、評価項目ごとに対する学生個人の OSCE 得点と学年平均点をレーダーチャートで表し、受験した当日のうちに学生に印刷したものを配布し、総評を行った。このことによって学生へのフィードバックが適切に行われ、学生の学修効果を高め、学修の動機付けとなっていたことが学生インタビューからも明らかになった。

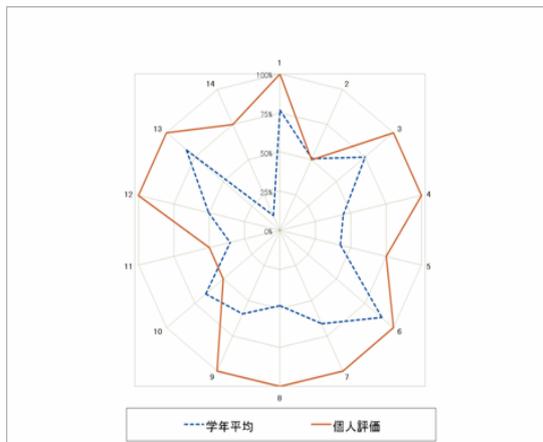


図 2. 評価項目別得点率のレーダーチャート

(4) OSCE 評価結果ならびに終了後の学生、

教員、模擬患者対象のアンケート調査から、学生の到達度を困難にしている技術項目を抽出し、次年度以降の教授法を改善した。

また、2つの技術項目を組み合わせた課題では、時間内に終了できない学生がいたことから、多重課題の演習の導入についての検討が示唆された。評価内容や評価基準の客観性について、議論を重ね、複数教員による評価の不一致が最小限になるよう、他領域の教員でピアレビューを行った。今後も、評価者の客観的評価が可能な基準の再検討と評価者間における基準の共通理解のレディネスが重要であることが示唆された。

以下に、本研究の成果をまとめた。

① 本学 4 年間の学士課程における「看護実践能力の育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標」を一般目標と行動目標に分けて各学年別に修得レベルを明確にした。さらに、育成される看護実践能力の技術項目についても同様にどの学年で修得するのかを明示し、全学生に公開することができた。

② 1～4 年次生に対してそれぞれ学年末に OSCE を実施し、学年ごとの実践能力到達度を評価した。OSCE の課題は、到達目標や教授内容との整合性を確認した上で作成した。また、同じ学年内の複数課題について難易度や到達度を相互に確認し、調整することで課題ごとのばらつきを最小限にすることができた。

③ OSCE 評価結果は、次年度の課題作成や各専門領域における演習等の教授内容・方法に反映されるよう、継続的に検証作業を行った。特に各専門領域の科目でどの看護技術項目が教授されるかをマッピングし、学年末 OSCE 課題として適切な項目を抽出することができた。

今後は、臨地スタッフとの協力のもとに、よりリアリティのある OSCE 課題の作成、評価内容や基準の精練化、OSCE 課題数を増やし、プール制とすることなどが課題とされ、これらの実現に向けて検討していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

① 大野夏代、樋之津淳子、中村恵子、OSCE におけるコミュニケーションスキルの評価
看護展望、査読無、メヂカルフレンド社、第 35 巻、第 4 号、2010、10～15 頁

② 多賀昌江、樋之津淳子、福島真里、太田晴美、学生からみた客観的臨床能力試験 (OSCE) トライアルの意義、札幌市立大学研究論文集、査読有、第 3 巻、第 1 号、2009、27～34 頁

③ 樋之津淳子、渡邊由加利、中村恵子、看護教育への模擬患者活用、看護展望、査読無、

メヂカルフレンド社、第 34 巻、第 12 号、2009、67～71 頁

④樋之津淳子、基礎看護学領域での看護実践能力到達度と OSCE による実践能力評価、看護展望、査読無、メヂカルフレンド社、第 33 巻、第 3 号、2008、22～26 頁

〔学会発表〕(計 12 件)

①樋之津淳子、松浦和代、坂倉恵美子、宮崎みち子、スーディ神崎和代、加藤登紀子、河野總子、守村洋、中村恵子、看護系大学における学年別 OSCE の取り組み－3 年次課題の評価項目と看護実践能力項目・学修行動目標の分析－、第 29 回日本看護科学学会学術集会(千葉)、平成 21 年 11 月 28 日

②樋之津淳子、坂倉恵美子、松浦和代、宮崎みち子、看護学教育における学年別客観的臨床能力試験(OSCE)の取り組み、日本看護学教育学会第 19 回学術集会(北見)、平成 21 年 9 月 21 日

③樋之津淳子、松浦和代、中村恵子、坂倉恵美子、宮崎みち子、加藤登紀子、スーディ神崎和代、河野總子、守村洋、札幌市立大学看護学部における「育てる OSCE」への取り組み－OSCE 評価項目と看護実践能力項目・到達行動目標の分析－、第 28 回日本看護科学学会(福岡)、平成 20 年 12 月 13 日

④坂倉恵美子、加藤登紀子、渡邊由加利、新納美美、河村奈美子、進藤ゆかり、原井美佳、樋之津淳子、模擬患者養成コースの試み－市民ボランティアの参画－、日本看護学教育学会第 18 回学術集会(つくば)、平成 20 年 8 月 2 日

⑤三上智子、鶴木恭子、樋之津淳子、看護実践能力養成教育としての客観的臨床能力試験(OSCE)の取り組み－OSCE 実施に対する教員へのアンケート結果－、日本看護学教育学会第 18 回学術集会(つくば)、平成 20 年 8 月 2 日

⑥菅原美樹、藤井瑞恵、佐藤公美子、吉川由希子、高室典子、樋之津淳子、神島滋子、工藤京子、小坂美智代、瀧本雅昭、中村恵子、看護実践能力養成教育としての客観的臨床能力試験(OSCE)の取り組み－2 年次学生の到達度と評価内容の検討－、日本看護学教育学会第 18 回学術集会(つくば)、平成 20 年 8 月 2 日

⑦菊地ひろみ、照井レナ、太田晴美、星美和子、河野總子、S. 神崎和代、樋之津淳子、体験学生による OSCE 実施に関する評価、日本看護学教育学会第 18 回学術集会(つくば)、平成 20 年 8 月 2 日

⑧太田晴美、吉川由希子、高室典子、佐藤公美子、菅原美樹、藤井瑞恵、樋之津淳子、看護実践能力養成教育としての客観的臨床能力試験(OSCE)の取り組み－PC を活用した OSCE 支援システム Mulberry の開発－、日本

看護学教育学会第 18 回学術集会(つくば)、平成 20 年 8 月 2 日

⑨吉川由希子、高室典子、佐藤公美子、菅原美樹、藤井瑞恵、樋之津淳子、松浦和代、宮崎みち子、看護実践能力養成教育としての客観的臨床能力試験(OSCE)の取り組み－実施マニュアルの作成と実施－、日本看護学教育学会第 18 回学術集会(つくば)、平成 20 年 8 月 2 日

⑩佐藤公美子、渡邊由加利、樋之津淳子、吉川由希子、高室典子、菅原美樹、藤井瑞恵、大野夏代、鶴木恭子、三上智子、看護実践能力養成教育としての客観的臨床能力試験(OSCE)の取り組み－1 年次学生の到達度と評価内容の検討－、日本看護学教育学会第 18 回学術集会(つくば)、平成 20 年 8 月 2 日

⑪樋之津淳子、松浦和代、坂倉恵美子、宮崎みち子、河野總子、中村恵子、客観的臨床能力試験(OSCE)トライアルにおける課題評価、第 27 回日本看護科学学会(東京)、平成 19 年 12 月 7 日

⑫樋之津淳子、坂倉恵美子、松浦和代、宮崎みち子、河野總子、中村恵子、1 年次を対象とした客観的臨床能力試験(OSCE)を用いた基礎看護技術の評価、日本看護学教育学会第 17 回学術集会(福岡)、平成 19 年 8 月 11 日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

樋之津 淳子 (HINOTSU ATSUKO)
札幌市立大学・看護学部・教授
研究者番号：90230656

(2) 研究分担者

加藤 登紀子 (KATOH TOKIKO)
札幌市立大学・看護学部・教授
研究者番号：10101114

(H20→H21：連携研究者)
河野 總子 (KAWANO FUSAKO)
札幌市立大学・看護学部・教授
研究者番号：40295910

(H20→H21：連携研究者)
坂倉 恵美子 (SAKAKURA EMIKO)
札幌市立大学・看護学部・教授
研究者番号：10292038

(H20→H21：連携研究者)
スーディ 神崎和代 (SOODI KANZAKI KAZUYO)
札幌市立大学・看護学部・教授
研究者番号：40452990

(H20→H21：連携研究者)
中村 恵子 (NAKAMURA KEIKO)
札幌市立大学・看護学部・教授
研究者番号：70255412

(H20→H21：連携研究者)

松浦 和代 (MATSUURA KAZUYO)
札幌市立大学・看護学部・教授
研究者番号：10161928

(H20→H21：連携研究者)

宮崎 みち子 (MIYAZAKI MICHIKO)
札幌市立大学・看護学部・教授
研究者番号：70295913

(H20→H21：連携研究者)

大野 夏代 (OONO NATSUYO)
札幌市立大学・看護学部・准教授
研究者番号：40223911

(H20→H21：連携研究者)

佐藤 公美子 (SATO KUMIKO)
札幌市立大学・看護学部・講師
研究者番号：30324213

(H20→H21：連携研究者)

渡邊 由加利 (WATANABE YUKARI)
札幌市立大学・看護学部・講師
研究者番号：10310088

(H20→H21：連携研究者)

太田 晴美 (OTA HARUMI)
札幌市立大学・看護学部・助手
研究者番号：90433135

(H20→H21：連携研究者)

多賀 昌江 (TAGA MASAE)
札幌市立大学・看護学部・助手
研究者番号：20433138

(H20→H21：連携研究者)

鶴木 恭子 (TSURUKI KYOKO)
札幌市立大学・看護学部・助手
研究者番号：90452995

(H20→H21：連携研究者)

福島 眞里 (FUKUSIMA MARI)
札幌市立大学・看護学部・助手
研究者番号：10433137

(H20：連携研究者)

三上 智子 (MIKAMI TOMOKO)
札幌市立大学・看護学部・助手
研究者番号：70452993

(H20→H21：連携研究者)

(3)連携研究者

守村 洋 (MORIMURA HIROSHI)
札幌市立大学・看護学部・准教授
研究者番号：50285540

吉川 由希子 (YOSHIKAWA YUKIKO)
札幌市立大学・看護学部・准教授
研究者番号：50269180